

結城市立結城東中学校 二年

すべての子どもに子ども時代を

須^す藤^{どう}美^み桜^お

私は、すべての子どもが平等に、子どもらしく過ごせる社会を実現したいです。皆さんは、ヤングケアラーという言葉を知っていますか。ヤングケアラーとは、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを日常的に行っている子どものことです。

私がヤングケアラーという言葉を知ったのは、テレビで見たドキュメンタリー番組です。その番組では、若年性認知症になってしまった父親の介護をする高校生の男の子が紹介されていました。私はその番組を見て、とても衝撃を受けました。なぜなら、彼の日常は、私のそれとはかけ離れていたからです。私は放課後には部活動のテニス、その他、ピアノや書道、塾など、たくさんの習い事に通わせて

もらっています。私はそれを普通のことだと思い、友達も同じだと信じて疑いませんでした。しかし、彼の毎日は、私とは何もかもが違います。父親が若年性認知症を発症した中学生の頃から、部活動をせず、学校が終わるなり帰宅。習い事や塾にも行かずに、夜、働きに出る母親と交代して、一晩中ずっと一人で父親の介護をします。更に、幼い妹の面倒までみていました。毎日寝不足の状態で学校に行くので、授業に集中できず寝てしまうことも度々ありました。

私には彼と同じ高校生の兄がいます。高校に通い、部活動をして、休日には友達と遊びに出かけることもあります。文化祭の日には、「これから打ち上げ！クラス全員で焼肉だ。」とわくわくしながら出かけていきました。ここでもし、兄が彼と同じ状況だったら、打ち上げに参加できただしよ

うか。いいえ、楽しそうに会場に向かうクラスメイトを横目に家に帰り、父親の世話をしていたに違いありません。彼はどんな気持ちで毎日を過ごしているのだろう。辛くても辛いと言えずに、自分がやるしかないと言いつけ、感情にふたをして、自分を追い込んでいるのではないか。もし、私が同じ状況だったら、彼のように自分を犠牲にして家族の介護ができるだろうか。いろいろな考えが頭をよぎり、苦しい気持ちになりました。

令和二年度に「ヤングケアラーの実態に関する調査研究」として、中高生を対象とした全国調査が初めて行われました。その結果。中学二年生の57%が、世話をしている家族が「いる」と回答しています。注目すべきは、「世話をしているために、やりたいけれどできていないこと」という質問に、世話をしている中学二年生のうち、58%が「特にない」と答えている点です。そんなはずなのに…。番組の中で彼も、家族の世話をするのは当たり前で、この状況は特別なことじゃないといった様子だったことを思い出しました。

私達は、自分の役割を果たす責任感を問われることが多いと思います。私も「他人に迷惑をかけてはいけない。」と言われたことがあります。責任感をもつことは大切だと

私も思います。しかし、そのことだけが強調されると、「家族のことは家族で解決するのが当たり前。誰かに任せるなんて無責任。」という風潮が生まれ、ヤングケアラー自身の声の上げにくさにつながってしまう心配があると思います。もちろん、大切な家族を自分で責任をもって世話しようとすることは素晴らしいことです。でも、その気持ちと一緒に「子どもらしく勉強やスポーツに打ち込みたい、友達と遊ぶことだって思う存分楽しみたい。」という望みをもつてもいいことを、そう願うことは、決して家族をないがしろにしていることではない、ということ伝えたいです。

しかし、ヤングケアラーに対する認知度は、まだまだ低いのが現状です。令和三年度に行われた一般国民調査では、「聞いたことがあり、内容も知っている」と答えたのは全体の約三割です。ヤングケアラーの現状を理解し、「誰もが子どもらしく子ども時代を過ごす権利がある」と考える人が増えることが、改善の第一歩だと思います。私も、これからは、以前とは違った視点でも、友達をみることでできると思います。声なきサインに気付き、手を差し伸べられる人になりたいです。